



差し迫った戦い

最後の戦い、ハルマゲドンの本質

大争闘シリーズ No.8



大争闘シリーズ No. 8

差し迫った戦い

最後の戦い、ハルマゲドンの本質

(キリストとサタンの大争闘 36 章)

目次

Contents

サタンの目的は何か	1
統治に不可欠なもの	5
無法がもたらすもの	8
墮落の原因	11
二大誤謬と三重の結合	14
破滅への道	18
忠実な者が非難される	21
教会と国家の一致	25

はじめに

地球のあらゆる勢力が最後の戦いに結集する！

各時代の争闘、善と悪の戦い、真理と誤謬の戦いは何であるのか。

社会の無法、放蕩、墮落の原因は何か。

なぜ、近年、異常なほど大災害が頻繁に起こっているのだろうか。

「キリスト教界で受け入れられている誤謬ほど、天の神の権威に大胆に打撃を与えるものはなく、また、神の律法はもはや人間を拘束しないという、急速に増しつつある近代的教理ほど、理性の命令に真っ向から反しており、結果の有害なものはない」

今、我々の目の前に展開されつつある、ローマ法王教とプロテスタントと近代心霊術の三重の結合は何を意味するか。

我々の世界はどこに向かっているのか。

サタンの目的は何か

天における大争闘が始まった当初から、サタンが目的としていたのは神の律法を覆すことであつた。彼が創造主に対する反逆を始めたのは、この目的を達成するためであつた。そしてサタンは、天から追放されたにもかかわらず、この地上でも相変わらず同じ戦いを続けてきた。人を欺き、それによって神の律法を犯させることこそ、サタンが着々と追い求めてきた目的である。このことは、律法全体を廃することによって成し遂げられても、あるいはまた、戒めの一つを拒むことによって成し遂げられても、最終的な結果は同じである。「その一つの点」でも犯す者は、律法全体に対する軽蔑をあらわすのであり、その影響や行動は罪に加担するものであつて、「全体を犯したことになる」のである(ヤコブ 2:10)。

神の戒めを軽蔑するために、サタンは聖書

の教義を曲解しそうすることによって、聖書を信じると告白する幾千もの人々の信仰に間違った考えを混入してきた。真理と誤謬の最後の大争闘は、言うならば、長い間続いてきた神の律法に関する論争の最後の戦いにほかならない。我々は今や、この戦い、すなわち、人のおきてと主の戒めとの間の、また、聖書の宗教と作り話や言い伝えの宗教との間の戦いに入っているのである。

この戦いにおいて、真理と正義に対抗して結束する勢力が、今活発に働いている。幾世紀にもわたって、苦難と血の大きな犠牲を払って我々に伝えられてきた聖なる神のみ言葉は、ほとんど尊重されていない。聖書はどんな人の手にも入るが、それを真に人生の道



しるべとして受け入れる人は極めて限られている。不信仰は単に世の中ばかりでなく、教会内にも驚くほど広くゆきわたっている。多くの人々は、キリスト教信仰の支柱となっている教理そのものを否定するようにさえなっている。靈感を受けた記者たちによって書かれている、創造の偉大な事実、人類の堕落、贖罪、神の律法の永遠性などの大真理が、自称キリスト教界の大部分の人たちによって、全体的に、あるいは部分的に拒絶されている。知恵と自主性を誇る幾千もの人々が、聖書に絶対的な信頼を置くことを弱さの証拠と考え、聖書の内容にいちいち非難を浴びせたり、その最も重要な真理を抽象化したり言い抜けたりすることを、優れた才能や学識の証拠だと思っている。神の律法が変更されたとか廃されたとかいうことを、信者たちに教えている牧師や、学生たちに教えている教授や教師が多い。そして、神の律法の要求は依然として有効であり、字義通りに従わなければならないものであると認める者は、嘲笑と軽

蔑にしか値しないと思われている。

人々は真理を否定することによって、その著者であられる神を否定している。彼らは、神の律法を踏みにじることによって、律法の制定者であられる神の

権威を否定している。偽りの教理や理論という偶像を刻むことは、木や石の偶像を刻むのと同様にたやすい



ことである。サタンは、神の属性を誤り伝えることによって、人々に神についての誤った認識を抱かせるのである。多くの人々にとって、主の代わりに哲学的偶像が王位を占めている。一方、み言葉の中に、キリストの中に、そして創造のみ業の中に啓示されている生ける神を礼拝する人は、ごくわずかである。数多くの人々は自然界の形象を崇拜し、神格化しながら、自然

の中に啓示された真の神を否定している。形こそ違おうが、偶像崇拜は、今日のキリスト教会にも、古代イスラエルのエリヤの時代にあったのと同じように存在している。自ら賢人と称する多くの人々、哲学者、詩人、政治家、ジャーナリストなどの神、洗練された上流社会、多くの大学、総合大学、果てはいくつかの神学校などという神々も、フェニキヤの太陽神バアルとほとんど変わらない。

統治に不可欠なもの

キリスト教で受け入れられている誤謬ほど、天の神の権威に大胆に打撃を与えるものはない、また、神の律法はもはや人間を拘束しないという、急速に力を増しつつある近代的教理ほど、理性の命令に真っ向から反しており、結果の有害なものはない。どの国もみな法律があって、これを尊重しこれに服従することが要求さ

れる。法律がなければ政府は存在することができない。天地の創造主に、自ら造られた被造物を治める律法がないなどということが、想像できるであろうか。仮に、ここに著名な牧師がいて、彼が、「国を統治し、市民の権利を擁護する法律などに従う必要はない。なぜなら、それは人民の自由を束縛するから」などと公然と宣言したとしたらどうだろう。このような人たちは、いつまで講壇に立つことを許されるだろうか。国家の法律を無視することは、あらゆる政府の基礎である神の律法を踏みにじるよりも重い罪科であろうか。

一国家でさえ、その法律のすべてを廃して、人民の好き勝手にさせるということはあり得ないのに、まして、全宇宙の支配者なる神が、その戒めを無効にし、不義な者を罪に定め、従う者を義とする規準なしにこの世を放置されることなど、あり得ないことは言うまでもない。人々は、もし神の律法を無効にした場合、どのよう

な結果になるか知っているのであろうか。実はその実験はすでに試みられたのである。フランスにおいて、無神論主義が支配的な勢力になったときに演じられた光景は、恐るべきものであった。神が課せられた拘束を投げ捨てることは、最も残酷な暴君サタンの支配を受け入れることであるということが、そのとき世界に証明された。したがって、義の標準が廃されるということは、サタンがこの地上に権力を打ち立てる道を開くということにほかならない。

神の戒めが拒絶されるところではどこでも、罪が、もはやいまわしく思えなくなり、義は慕わしいものではなくなる。神の統治に従うことを拒む者は、自らを治めるのに全く不適當な者となる。彼らの有害な教えを通して、不従順の精神が、もともと支配されることを喜ばない子供や青年たちの心に植え付けられ、無法で放縱な社会が生じる。多くの人々は、神のご要求に従う人たちの信心深さを嘲笑しながら、サタン

の惑わしを熱心に受け入れる。彼らは欲情を欲しいままにし、かつて異教徒たちの上にさばきを招いた罪にふけるのである。

無法がもたらすもの

人々に神の戒めを軽んじるように教える者は、不従順の種をまき、不従順を刈り入れる。神の律法によって課せられている拘束をすべて取り去るならば、人間の法律もただちに無視されるであろう。神は不正な習慣、貪欲、虚偽、詐取を禁じておられるので、世俗的な富や繁栄を求める人々は、自分たちの道の障害となる神の戒めを踏みにじるのである。しかし、神の律法をおろそかにするならば、彼らの予期しない結果を引き起



こすことになる。もし律法が、効力を失うようなことにでもなれば、犯罪が次から次へと多発することになる。財産は、もはや安全ではなくなる。人々は、力づくで隣人の持ち物を手に入れ、最も強い者が必然的に最も富める者になる。生命そのものが尊重されなくなる。結婚の誓約は、もはや家庭を守る神聖なとりでの用をなさなくなる。特定の権力者たちが、自分たちの欲望を欲しいままにして、他人の妻でさえ奪うようになる。十誡の第五条は第四条と共に無視され、子供たちは、自分の親を殺害することさえためらわなくなり、その墮落した欲望さえ達成できればそれでよい、と考えるのである。文明社会は強盗、殺人などの犯罪の巣と化し、平和、安らぎ、幸福などは地上から消滅してしまう。

人間は神の律法に従う義務から解放されているという教えが、すでに道徳的な観念を弱くし、この世にいろいろな罪悪が入り込む門を

開いてしまった。無法、放蕩^{ほうとう}、墮落が、押し寄せる潮のように、我々の上に流れ込んできている。家庭においてもサタンは働いている。サタンの旗は、キリスト者と称する家庭にさえも翻っている。ねたみ、中傷、偽善、不和、競争、争い、聖なる信頼に対する裏切り、肉欲の放縦などが、あらゆるところで見られる。社会生活の土台であり骨組みである宗教的原則と教理の全体系が、ひとかたまりとなってよろめき、今にも崩壊しそうに見える。凶悪きわまる犯罪者が、投獄されたような場合でも、何かうらやまれるほどの手柄を立てたかのように、贈り物を受けたり注目を集めたりすることがしばしばある。彼らの性格と犯罪行為が、大々的に宣伝される。新聞や雑誌は犯罪行為の詳細を報道し、他の人々に、詐欺や窃盗や殺人の手口を知らせている。そしてサタンは、このような影響をもたらした自分の邪悪な計略の成功に、狂喜するのである。悪行、不純行為、理由のない残忍な殺傷、不節制など、さまざまな罪惡の恐るべき

増加を見るとき、神を畏れる者たちはみな目ざめて、この邪悪きわまる潮流をとどめるにはどうしたらよいかと考えてみなければならない。

裁判所は腐敗している。支配者たちは利益と享樂を求めて行動している。不節制によって多くの人々の能力がくもらされ、サタンが彼らをほとんど完全に支配しているような状態になっている。法曹界は墮落し、買収され、だまされている。飲酒、歓樂、欲情、ねたみ、あらゆる種類の不正が、為政者たちの中に現れている。「公平はうしろに退けられ、正義ははるかに立つ。それは、真実は広場に倒れ、正直は、はいることができないからである」(イザヤ 59:14)。

墮落の原因

ローマの主権の下にゆきわたった罪惡と靈的暗黒は、教会が聖書を抑圧したための避けら

れない結果であった。しかし、宗教自由が謳われているこの時代において、福音の照り輝く光のもとで不信仰が広がり、神の律法が退けられ、その結果墮落や腐敗が生じた原因は、どこに見いだされるであろうか。サタンは、この世から聖書を取り除くことによって世界を支配しようと試みたが、聖書が広くゆきわたった現在、それは不可能になった。そこで同じ目的を達成するために、違った手段に訴えている。聖書に対する信仰を破壊することは、聖書そのものを破壊するのと同様に、彼の目的に役立つのである。神の律法はもはや拘束力がない、という信仰を導入することによって、彼は、ちょうど戒めに全く無知である場合と同じほど効果的に、人々を導いて罪を犯させるのである。そしてサタンは現在も、昔の時代と同様に、教会を通して自分の計画を進めようと働いている。今日の宗教団体は、聖書の中に明白に示されている俗受けのしない真理に耳を傾けようとしない。そしてその真理と対抗するために、懐疑論の種を広く

まくことになった解釈と立場を採用した。彼らは、人間の霊魂は不滅であって、死後も意識があるというカトリック教の誤謬に固執して、心霊術の惑わしに対する唯一の防備を拒絶してきた。永遠に苦しめられるという教えは、多くの人々に、聖書に対する信仰を失わせた。また、十戒の第四条の要求が人々に示されるとき、第七日安息日の遵守が命じられていることが分かる。すると一般の多くの牧師たちは、あまり守りたくない義務から逃れる唯一の道として、神の律法はもはや拘束力を持っていないと宣言する。このようにして彼らは、律法も安息日も共に捨て去るのである。安息日の改革運動が広がるにつれて、第四条の要求を無効にするため、十戒そのものを拒否する風潮が一般的となり、世界中に拡大していくのである。以上述べたように、宗教界の指導者たち



の教えは、不信仰への道、心霊術への道、そして神の律法に対する軽蔑への道を開いてきた。だから、今日のキリスト教界に存在する不法の恐るべき責任は、これらの指導者たちにあるのである。

二大誤謬と三重の結合

ところがこの階層の人たちは、このように急速に広がりつつある墮落の風潮は、主としていわゆる、「キリスト教的安息日」（この場合は日曜日を指す）を汚すことにその原因があるのだから、日曜日遵守を強制することが社会道徳を大いに向上させるであろうと主張する。この主張が特に強調されるのは、真の安息日の教理が最も広く宣べ伝えられてきたアメリカにおいてである。アメリカでは、最も目立った重要な道徳的改革の一つである禁酒禁煙運動が、しばしば日曜日遵守運動と結びつけられる。日曜日遵

守運動の主張者たちは、自分たちは社会の最高の利益を促進するために活躍していると称し、この運動に参加しない者は、禁酒禁煙運動と改革の敵であると非難されるのである。しかし、誤謬を助長する運動が、それ自体は善である働きと結合しているからといって、その誤謬を支持して良いということにはならない。健全な食物に毒を混ぜてそれを隠すことはできても、それが毒であることに変わりはないのである。それどころか、毒と気づかれないうために、かえっていっそう危険なものとなる。虚偽をもっともらしく見えるようにさせるに足るだけの真理と結合させることが、サタンの策略の一つである。日曜日遵守運動の指導者たちが、仮に人々が必要としている改革を提唱し、聖書と調和している諸原則を提唱したとしても、その中に、神の律法に矛盾する要求が含まれているかぎり、主のしもべたちは、彼らと手をつなぐことはできない。彼らが神の戒めを捨てて人間の戒めに重きを置いたことは、どんな理由によっても正当

化できないのである。

サタンは、霊魂不滅と日曜日の神聖化という二つの重大な誤りを通して、人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる。前者は心霊術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す。合衆国の新教徒は、今や、率先して、心霊術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべ、また、深淵のかなたにあるローマの権力と握手するために手を差し出している。この三重の結合による権力の下で、ついに、アメリカはローマの例にならって良心の権利を踏みじめるのである。

心霊術が、現代の名ばかりのキリスト教をますますそっくりまねるようになるにつれて、それは人々をだま



し、誘惑のわなにかけるのに、いっそう大きな力を持つようになる。サタン自身も、近代的な

形態に応じて姿を変える。彼は、光の天使に姿を変えて現れる。心霊術を通して奇跡が行われ、病人はいやされ、否定することのできない多くの不思議なことが行われる。そして、悪霊が聖書に対する信仰を告白し、教会の諸制度に敬意を表すので、そうした霊の働きは神の力の現れとして受け入れられる。

現在は、自称キリスト者と不敬虔^{けいけん}な人たちとの間の区別がほとんど分からない。教会員でさえ世俗の人たちの好むものを愛し、喜んで彼らと一緒に行動している。そこでサタンは、強力にこの人たちを一体として結合させ、この人々を一人残らず心霊術に引き入れることによって、自分の働きを有利に導こうとしている。カトリック教徒は、奇跡を真の教会の一つの確証として誇っているので、不思議なことを行うこの力に容易にだまされる。また新教徒も、真理の盾^{たて}を投げ捨ててしまったので、これに惑わされることは避けられない。これにより旧教徒も

新教徒も、また世俗の人たちもみな同じように、——見敬虔のように見えるが、——本質の伴わない形だけの敬虔を受け入れるであろう。そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させる千のための一大運動と、長く待ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである。

破滅への道

サタンは、心霊術を通して人々の病気をいやし、もっと高尚な新しい信仰を提供すると称して、あたかも人類の恩人のように見せかける。だが同時に、彼は破壊者として働く。彼の誘惑は、多くの人々を破滅に導く。不節制が人間の理性を廃らせ、肉欲の放縦、争い、流血が続く。サタンは戦争を喜ぶ。なぜなら戦争は、魂の最悪の激情をかき立て、悪と流血に染まった犠牲者たちを永遠に葬り去ってしまうからである。国々が互いに争い、戦争となるように扇動する

のがサタンの目的である。彼は、このようにして人々の心を乱すことによって、神の日に立つ備えの働きを妨げているのである。

サタンはまた、備えのできていない魂を自分の収穫として取り入れるために、自然力を通して働く。彼は自然の神秘を研究してきたので、神が許される範囲内で自然を支配するため全力を用いる。彼がヨブを試みることを許されたとき、どんなに速やかに、家畜の群れやしもべたちや家や子供たちが取り去られ、またたく間に事件が相次いで起こったことであろう。被造物を保護し、破壊者の力から守られるのは神である。しかし、キリスト教界が主の律法をないがしろにしてきたため、主は、なすと仰せになったことをその通りなさるであろう。すなわち、主は地上から祝福を取り去り、神の律法に反逆している者たち、また人にそうするように教えたり、強制したりしている者たちから、保護のみ手を取り除かれるであろう。サタンは、神が

特別に保護されないすべての者に対する支配力を持っている。彼は、自らのたくらみを押し進めるために、ある者たちには恩恵と繁栄を与え、また、他の者たちには災いをもたらす。そして人々に、彼らを悩ませているのは神だと信じさせようとする。

サタンは人々に対し、表面的には、あらゆる病気や苦しみをいやすことのできる、偉大な医者のように見せかけながら、他方では、病気や災害を生じさせ、ついには人口の多い都市が破滅して荒廃する。彼は現在も活動している。海や陸における事故や災害、大火災、激しい突風、すさまじい^{こうひょう}降雹、あらし、洪水、^{たつまき}竜巻、津波、地震など、あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。彼は、取り入れ間際の穀物



を全滅させ、ききんと困窮を引き起こす。彼は、空気を恐るべき病毒で汚染させ、幾千の者が疫病で倒れる。これらの出来事はますます頻繁ひんぱんになり、しかも、より激しく悲惨なものになる。破滅は人間にも、動物にも及ぶ。「地は悲しみ、衰え、……天も地と共にしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ」(イザヤ 24:4,5)。

忠実な者が非難される

しかも悪賢い欺瞞者サタンは、神に仕える者たちが、これらの災害を引き起こす原因になっていると、人々に説く。天の神の不興を引き起こしてきた人たちは、彼らに対して無言の譴責けんせきとなっていた神の戒めに服従する人々を標的にして、すべての災いの原因は、こうした人々にあるかのように非難する。日曜日安息日を犯し

たことが神を怒らせ、その罪が災害をもたらすことになったので、それは日曜日遵守が厳しく実施されるようにならなければやまない、と宣言される。また、第四条の要求を主張して日曜日遵守を傷つける者は民を悩ます者であって、神の恩寵とこの世における繁栄の回復とを妨げている、と宣言される。このようにして、昔神のしもべに向けられた非難が、同じようにもっともらしい理由のもとにくり返される。「アハブはエリヤを見たとき、彼に言った、『イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいるのですか。』彼は答えた、『わたしがイスラエルを悩ますものではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです』」（列王紀上 18:17,18）。偽りの申し立てや非難によって怒りをかき立てられた民衆は、神の使者であるしもべたちに対して、昔背信のイスラエルがエリヤに対してとったのと同じような態度をとるであらう。

心霊術を通して現される奇跡の力は、人間に従うよりは神に従うことを選ぶ人たちに、不利な影響を与える。いろいろな霊からの伝達は、神は日曜日を拒絶する者たちに、その間違いを悟らせるために自分たちを送られたのだと宣言し、国家の法律は、神の律法と同様に遵守しなければならないと断言する。悪霊たちはまた、世の中の邪悪や腐敗を嘆くような口ぶりで、宗教教師たちの証言に同意して、道徳的に墮落している状態は日曜日の冒瀆に原因があると告げる。彼らの証を信じようとしないすべての者に対して、ますます激しい怒りが引き起こされる。

サタンが、神の民との最後の大争闘に用いる手段は、彼が、天において大争闘を開始した時に用いたものと同じである。彼は、神の統治の安定を推進しようとしているのだと公言しながら、一方ではこれを転覆するために、ひそかにあらゆる努力を傾けた。そして、自分が達成しようとしている働きを、忠実な天使たち

のせいにした。同じような欺瞞の手段が、ローマ教会の歴史において明白に認められる特徴であった。それは、天の神の代理者として行動していると公言しながら、自らを神の上に置き、神の律法を変えようと企^{たくら}んだ。ローマの支配下にあつて、福音に対して忠実であつたために死刑にされた人たちは、悪を行う者と宣言され、サタンの味方とののしられ、まるで罪人のように非難された。そして彼らに対して、あらん限りの汚名と侮辱を浴びせ、人々にも彼ら自身にも最悪の犯罪人であると思わせるために、あらゆる手段がとられた。今日でも同じである。サタンは、神の戒めを守る者たちを滅ぼそうとする一方では、この人たちが律法の違反者、神を汚す者、また地上に災害をもたらす者として、いわれのない非難や訴えを受け続けるよう計るのである。

教会と国家の一致

神は、決して意志や良心を強制されない。しかし、他の方法で誘惑できない



者を自分の自由にしようとするサタンの常套手段は残酷な強制である。サタンは時には脅迫を、時には暴力を用いて人間の良心を支配し自分に服従させようと努める。それを実現するためには、宗教と政治の当局を通じて働き、神の律法に反抗して人間の法律を強制するよう働きかける。聖書の安息日を崇める者は、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落とを引き起こし、神のさばきを地上に招く者であるといつて攻撃される。彼らの良心的な信念は、強情で、適応性がなく、権威に対する侮べつであると宣告される。彼らは、政府に対して忠誠を尽くさないといつて告発される。

牧師たちは、神の律法に対する義務を否定しながら、一方では国家の権威に服従する義務は、神によって定められたものであると講壇から主張する。立法府や裁判所においては、神の戒めを守る者たちについて虚偽の訴えがなされ、有罪の宣告が下される。彼らの言葉は誤って解釈され、彼らの動機は最も悪質なものに作り上げられる。

プロテスタントの諸教会が、神の律法を擁護している明白な聖書の論拠を退けると、彼らは、聖書によっては覆すことができないような信仰を持った人々を、沈黙させたいと望むであろう。彼らは目をおおって事実を見ようとしないうが、実は、彼らはほとんどのキリスト教界が行っていること、すなわち、法王教の安息日の要求を認めることを良心的に拒否する人々を、迫害するようになる道を選びつつあるのである。

教会と国家の高官たちは、すべての階級の

人々に日曜日を尊重させるために、結束して買収や説得や強制を行うであろう。それには神の権威が全く及



んでいないので、その欠如を圧制的な法令によって補おうとする。政治的腐敗は、正義を愛し真理を尊ぶ思いを破壊しつつある。そして自由の国アメリカにおいてさえ、為政者や議員たちは民衆の歓心を買うために、日曜日遵守を強制する法律を求める大衆の要求に屈服する。これまで非常に、大きな犠牲を払って得られた良心の自由は、もはや尊重されなくなる。間もなく起ころうとしている争闘が、どのようなものになるかは、次の預言者の言葉によってうかがうことができる。「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対し

て、戦いをいどむために、出て行った」(黙示録 12:17)。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E.G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980) **56-2783** FAX(0980) **56-2881**

contact@srministry.com

www.srministry.com